

## 『裏庭でのできごと』

チャイムが鳴り、給食の時間が終わった。

食器を片付けると、校庭に向けて、みんな一斉に飛び出していった。

健二は、サッカーボールをボール箱の中から取った。

「健二、裏庭でやろうぜ。」

大輔と雄一が誘った。

「ええっ、裏庭はまずいよ。」

健二はそう答えてはみたものの、

「またこの前みたいに先輩にボールを取られてしまったらどうするんだよ。」

と大輔に言われては、返す言葉がなかった。

三人で、体育館の裏の『裏庭』に行くと、さすがにだれもいなかった。

突然、大輔が「あっ」と声を上げた。

「ほら、ほら、あそこ。」

大輔が指差すほうを見ると、一匹の猫が、物置の軒下にある鳥の巣に侵入しようとしていた。巣の中には、まだ生まれて間もないひなが見えた。

「ああっ、どうしよう」健二がそう思った瞬間、雄一がボールを猫めがけて投げていた。猫は、ボールに驚いて逃げた。しかし、次の瞬間、ガシヤーンという音がした。

雄一が投げたボールが物置の天窓に当たり、ガラスがはじけた。

「雄一よく助けたな。」

「でも、どうしよう。」

「しかたないだろ。ひなを助けようとしてやったことなんだから。先生に報告しに行けばいいよ。」

大輔は、ガラスを割ったことなど全然気にしていないようだった。

「じゃあ、先生に報告してくるよ。」

雄一は職員室へ行こうとした。

「雄一は、そんなの後でいいよ。俺たち、ひなの命を救うという、いいことしたんだぜ。少しぐらい遊んでもばちは当たらないぜ。」

大輔はボールを蹴りながら、そう言った。

「いや、今行ってくるよ。」

雄一は、大輔を振り切って職員室へと向かった。

残された健二は、ガラスの片付けを始めようとした。

「健二、ちょっとだけやろうぜ。」

大輔は健二に向けてボールを蹴ってきた。

二人は初め、軽く蹴っていたが、距離をとって強く蹴り始めた。

そのうち健二が蹴ったボールが、さっきの物置のほうに飛んでいった。

「しまった」と思った時には、ガシヤーンという音がして、ガラスが割れてしまった。見ると、さっき割ってしまったガラスのとなりのガラスが、粉々に飛び散っていた。

「どうしよう・・・」健二は、そう思った。

そこに雄一が松尾先生を連れてきた。

「先生、ここです。」雄一は、物置の天窓を指した。

「ひなが猫にとられそうになったので、あわててボールを投げてしまったのです。」雄一は事情を説明し始めた。

「先生、雄一はひなを助けようとしてやったことなんです。おかげであのひなが助かったんです。許してやってください。」

大輔がさかささそう言い添えて、雄一と松尾先生の間割って入り、事情を説明した。

「どうも、すみませんでした。」

雄一は深々と頭を下げた。

「よし、わかった。けがをしないようにしてガラスの破片を片付けておくように。終わったら、雄一は、職員室へ来るように。」

そう言い残して、松尾先生は職員室へ戻っていった。

「おい、どういうことなんだよ。ガラスが二枚割れているじゃないか。俺がさつき割ったガラスのとなりの、あのガラスは一体どうしたんだよ。」

雄一は大輔に言った。

「俺じゃないぜ。おまえが職員室へ行ってから二人で遊んでいたら健二がガラスを割ってしまったんだよ。」

大輔は、そう説明した。

「健二、おまえ、やつちやったのかよ。」雄一は言った。

「ああ・・・」健二は、力なく答えた。

「なんだよ、きたねえなあ。二人でやったことを俺の割ったガラスに便乗させて。おまえら、調子よすぎるぜ。」雄一は憤慨しているようだった。

「でも、俺がうまく言ってやったから、そんなにきつく怒られずに済んだじゃないか。そんなに冷たいこと言うなよ。友だちじゃないか。」

大輔は、そう言うどドリブルをしながら、校庭のほうへ行ってしまった。

残された二人の間には、気まずい雰囲気漂い、無言のままだった。昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

五時間目の授業は好きな英語だったが、健二は全然身が入らなかった。

授業が終わり、サッカー部の練習にいつて、大輔に会った健二は

「ぼく、先生に言いにいこうと思うんだ。」

と言った。

「いいよ、そんなこと。あの場で済んだことなんだから。」

「そんなこと言ったって・・・」

健二は後の言葉が続かなかった。

「いいか。俺を出し抜いて先生のところになんかいくなよ。おれの立場が悪くなるじゃないか。」

大輔はボールをもって、健二から離れていつてしまった。

健二は、練習が終わっても、気が重かった。

次の日、健二は昨日のことが気になって、足取りの重いまま、学校へ向かった。

健二は、雄一に

「ぼく、やっぱり松尾先生のところについてくるよ。」と言った。

「おい、大輔は・・・」雄一は、大輔のことを気にしているようだった。健二は首を横に振ると、一人で職員室へと向かった。

